

新編

西洋史辭典

京大西洋史辭典編纂會編

新 編
西洋史辭典

京大西洋史辭典編纂會編

東京創元社

新編 西洋史辞典

昭和58年3月5日 初版 定価 7,500 円
昭和58年4月25日 再版

編 者 京大西洋史辞典編纂会
発行所 株式会社 東京創元社
 代表者 平松一郎
 (162) 東京都新宿区新小川町1-5
 電話03-268-8231 振替東京6-1565
印刷 暁印刷株式会社
製 本 株式会社 鈴木製本所

序

歴史学にとって、歴史事実の正しい把握が何にもまして重んぜられねばならぬことはいうまでもない。事実に立脚しない歴史理論はフィクション以外のものではなく、歴史論とは呼び難いのである。けれども、あらゆる歴史事実を記憶することは不可能であるし、覚えていると思っていることでも、記憶違いである場合がすくなくない。この点から歴史辞典が必要となってくるのであるが、現在わが国のおかれている環境のなかでは、西洋の歴史知識を不可欠とすることが、日常生活においても、かなりの頻度で出てきていると思われる。研究者、教師、学生のみならず、広く一般人をも対象にした、いわば中辞典的なこの辞典を新編として、世に送る理由はそこにある。

かつて昭和33年6月、この辞典の原型をなす「西洋史辞典」が誕生し、その後、社会の要請をうけて改訂増補がなされ、昭和39年に、改まった形での出版をみた。しかし、改訂増補版が出てから今日までの約20年近い間に、世界は大きく揺れ動き、今やそれが歴史化して、加えるべきことが多くなった。そしてそれ以上に、歴史意識が変わり、認識を改めざるをえなくなってきたのである。

第2次世界大戦後の一定期間、わが国は欧米先進諸国を理想としてとらえ、いかにしてその水準に追いつくかといったことを課題としてきた。西洋史学もこの枠内にあって、それを歴史的に探求し、理論化するのを自らの使命としてきた。現在でも、西洋諸国に学ぶべきことは多い。それにしても、かつて目標にしてきた国が、今ではかならずしも絶対的ではなくなり、それに追いつき追いつくことだけが唯一の在り方ではないとするのが、むしろ共通した認識となり、歴史学もその角度から検討し直された。

欧米先進国絶対視と関連をもってであろうが、すでに戦前から、日本の西洋史学が対象にした国は、大部分が何らかの意味において日本の模範となりうる

国に限られてきた。それはイギリス、ドイツ、フランスであり、せいぜいアメリカ合衆国、ソ連でしかなかった。最近では、国際化時代を迎え、語学の多様性も加わって、これまでほとんど手がつけられていなかったような東欧、北欧、南欧、イベリア半島、ラテン・アメリカなどにも、十分とはいえないまでも光があてられるようになり、これまでは植民地としてだけみてきたアフリカやアジアの一部にも、それ自体の歴史と意味を与えるようになってきている。さらになによりも、国際的視点が強調されて、一国史のもつ意味は明らかに変化してきている。

以上のような変化に対応して、私たちは約10年前から、まったく稿を新たにした新編の作成にとりかかった。作業はさまざまな理由から遅々として進まず、一時は挫折かとも思われた。ようやく世に出る段になって、改めて辞典編集の難しさを感じている次第である。「新編 西洋史辞典」の項目数は約5000で、東欧、イベリア半島等に関する約500の新項目を追加し、反対に、かつては流行語のように使われた概念語等は思い切って削ったから、内容的には大きくいれかわっている。付録についても、内容を豊かなものにしたつもりであるし、また各項目毎に執筆者を明記した。

私たちはもちろん、この辞典が万全のものであるとは思っていない。それだけに、読者の指摘をうけながら、将来より良きものに育てなければならぬと考えている。

最後に、この辞典の編集、とりわけ索引の作成に格別の熱意をもって取り組んでもらった東京創元社編集部の方針に、心からのお礼を申しこえる次第である。

昭和57年12月

京大西洋史辞典編纂会代表

廣 實 源 太 郎

編纂委員

浅香 正 (同志社大学教授)
 川北 稔 (大阪大学助教授)
 田村 満穂 (奈良女子大学教授)
 富澤 霊岸 (関西大学教授)
 中村 賢二郎 (京都大学教授)
 廣實 源太郎 (大阪外国語大学教授)
 堀井 敏夫 (大阪大学教授)
 山本 幹雄 (京都工芸纖維大学教授)

越智 武臣 (京都大学教授)
 國本 哲男 (大阪大学教授)
 富岡 次郎 (京都大学教授)
 永井 三明 (同志社大学教授)
 服部 春彦 (京都大学助教授)
 藤繩 謙三 (京都大学教授)
 堀内 一徳 (奈良大学教授)

執筆者

会田 雄次
 荒武 鉄郎
 茨木 慶三
 岡部 健彦
 川北 稔
 國本 哲男
 末川 清
 谷 泰
 豊永 泰子
 中村 賢二郎
 中山 治一
 早川 良弥
 廣實 源太郎
 堀内 一徳
 松原 広志
 望田 幸男
 山本 茂

阿河 雄二郎
 飯田 収治
 今津 晃
 越智 武臣
 河村 貞枝
 鯖田 豊之
 鈴木 利章
 田村 満穂
 永井 三明
 中村 幹雄
 新田 一郎
 原 弘二郎
 藤繩 謙三
 前川 和也
 三宅 正樹
 森本 久夫
 山本 幹雄

浅香 正
 池本 幸三
 植村 雅彦
 加藤 一朗
 木崎 良平
 志邨 晃佑
 瀬原 義生
 富岡 次郎
 長田 豊臣
 中山 昭吉
 野田 宣雄
 樋口 謹一
 藤本 勝次
 前川 貞次郎
 村岡 健次
 山岸 義夫
 義井 博

浅田 実
 市川 承八郎
 大戸 千之
 兼岩 正夫
 衣笠 茂
 新村 祐一郎
 高橋 章
 富澤 霊岸
 長沼 忠兵衛
 中山 章
 服部 春彦
 樋口 隆康
 堀井 敏夫
 松田 武
 村田 数之亮
 山田 作男
 米田 治泰

(五十音順)

凡 例

I 項目について

- (1) 記述の順序は原則として、(a)項目名、(b)原語、(c)年代、(d)本文、(e)参照項目、(f)執筆者名とした。
- (2) 項目の排列は五十音順によった。その場合、長音は無視し、促音・拗音は独立した一字として扱った。清音と濁音は清音を優先させた。カタカナ表記が同一の人名は、原則としてファミリー・ネーム（それが同じ場合はファースト・ネーム）のアルファベット順に排列したが、中には生年順にしたものもある。同名の君主のときは1世、2世、3世……の順とした。

例 ① ブラウン Otto Braun ① スミス Adam Smith
 ② ブラウン John Brown ② スミス John Smith
 ① アリスタルコス（サモスの）（前310頃—230頃）
 ② アリスタルコス（サモトラケの）（前217—145）

- (3) 国や時代を異にする同一名称の項目は、単一項目にまとめ、本文中で区別を設けた。

例 パリ条約 [1] [2] [3] …… [7]

- (4) 人名で本名よりも通称や称号で知られているものは、通称・称号で示した。その場合には本名を原語で示すか、または本文のなかで示した。
- (5) 人名以外の項目は、一般に訳語で通用しているものは訳語で出した。定訳のない場合も、適当と思われる訳語で出したものがある。
- (6) 原語による表記、訳語のいずれも一般に使われているときは、いずれか一方を「本」項目とし、他方を「見よ」項目とした。

例 アングリカン・チャーチ ⇨ イギリス国教会
 民族主義 ⇨ ナショナリズム

- (7) 内容が他の項目に記述されている項目は「見よ」項目とした。

例 長期議会 ⇨ 清教徒革命

- (8) 項目名の次に（ ）を用いたのは次のような場合である。
 - (a) 例えば、労働不安（イギリス）のように国名を、フランチェスコ（アッシジの）のように地名を、最高価格法（フランス革命）のように事件名を、エジプト遠征（ナポレオンの）のように人名を挙げて限定した場合。
 - (b) 例えば、アンティオキア（アンティオケイア）のように言語の相違を、ドゥーマ（国会）のように訳語を、国際自由労働組合連盟（自由労連）のように略称を、スパルタ（ラケダイモン）のように別名を示した場合。
 - (c) 例えば、オットー1世（大帝）、フリードリヒ2世（大王）のように称号を

示した場合.

II 項目の原語について

- (1) 原則として当該国(地域)の言語を挙げた.
- (2) 2カ国以上にわたる事項, 国際関係の項目などには英語をあてた.
- (3) 表記はすべてラテン文字を使用した.
- (4) 項目名の一部を原語で表記するときは, それを()で囲んだ.
- (5) 称号のうち Sir は省略した.
- (6) 2カ国語以上の原語を挙げるときは, その国語名を下記の略号で付した.
英=英語, 独=ドイツ語, 仏=フランス語, 伊=イタリア語,
希=ギリシア語, 羅=ラテン語

III 外国語の写字・写音について

- (1) ギリシア文字, アラビア文字のラテン文字化は慣用の基準によった.
- (2) ロシア文字の写字は下表の基準によった.

ロシア文字	ラテン文字	ロシア文字	ラテン文字	ロシア文字	ラテン文字	ロシア文字	ラテン文字
А а	a	З з	z	П п	p	Ч ч	ch
В в	b	И и	i	Р р	r	Ш ш	sh
В в	v	Й й	i	С с	s	Щ щ	shch
Г г	g	К к	k	Т т	t	Ъ ъ	—
Д д	d	Л л	l	У у	u	Ы ы	y
Е е	e	М м	m	Ф ф	f	Ь ь	'
Ё ё	yo	Н н	n	Х х	kh	Э э	e
Ж ж	zh	О о	o	Ц ц	ts	Ю ю	yu
						Я я	ya

なお, ё は ж (zh), ч (ch), ш (sh), щ (shch) の直後では〈o〉とし,
〈yo〉とはしない. また ы й は y だけで表記する.

- (3) 外国語のカタカナ表記は一般に原語の発音を重視した. ただし, わが国で慣用されている表記が原語の発音と著しく異なる場合は, 慣用に従った.
- (4) ギリシア語, ラテン語を写音するとき, 原則として長音《ー》を省いた.
- (5) ギリシア語の y は《ュ》, ph は《フ》とした.

例 Mykenai ミュケナイ Sophokles ソフォクレス

- (6) ラテン語の v は《ウ》とした.

例 Valerianus ヲアレリアヌス

ア

アイアトン Henry Ireton(1611—51) イギリスの軍人、政治家。清教徒革命時 Cromwell の政策を最も忠実に推進した人。オクスフォード大学卒。1642年内乱勃発とともに議会軍に参加。46年 Cromwell の娘と結婚。軍がひとつの政治勢力となったことを示す47年の『軍の主張』の起草をはじめ、同年の独立派の憲法草案『建議要目』の起草に参加。パトニー会議では軍幹部の立場にたつて、兵士およびレヴェラーズと対立した。チャールズ1世の死刑執行状に署名。49年アイルランド征服に従い、Cromwell のもとで遠征軍副司令官。50年総督代理、しかし過労のため51年同地で病没。→清教徒革命、独立派 (長沼)

IFTU ⇨ **国際労働組合連合**

IMF ⇨ **国際通貨基金**

アイオナ島 Island of Iona スコットランドのヘブリデス諸島の小さな島。アイルランドとスコットランドを結ぶ中継地であり、6世紀にはアイルランドのダルリアーダ王朝のスコットランド支配を進めるうえで重要な拠点となった。この王朝のコンル王は563年王朝の一族であった聖コロンバにアイオナ島を与えた。コロンバはこの島に修道院を建て、ケルト的キリスト教の中心とし、スコットランドからノーサンブリアにかけて布教した。9世紀以後ノルマン人の侵略にさらされたが、修道僧の共同生活に適していたので13世紀にはふたたび尼修道院が建設された。 (富沢)

アイオリス人 希 Aioleis 英 Aeolians ギリシアの種族。ドリス人以前にギリシアに來り、歴史時代にはイオニア人やドリス人ほど優勢ではなかったが、アイオリス方言はテッサリアとボイオティア、エーゲ海北部の島々と小アジア西岸北部(アイオリス地方)に分布していた。アカイア人と近縁であろう。→アカイア人 (藤縄)

アイギナ(エギナ) Aigina ギリシアのサロニケ湾のほぼ中央にある島、またその都市。面積約80km²の小島で山地が多い。前1000年頃ドリス人が侵入。早くから海上に活躍、海軍の強大と通商による富によって有力な国となる。

前7世紀半ば頃アルゴス王フェイドンの領有時代にギリシアで最初の銀貨をつくり(亀の刻印あり)、その度量衡と共に広くギリシア世界に行われた。前6世紀のはじめ頃アテナイが海上に進出し始めると、両者の争いがおこり、しだいにアテナイのために圧迫され、勢いは振わなくなる。前5世紀はじめに東部の山中にアファイア神殿を建てたが、その破風はアーカイック末期の代表作(ミュンヘン博物館)。 (衣笠)

アイク兄弟 ⇨ **エイク兄弟**

七首伝説 Dolchstoßlegende 第1次世界大戦のドイツ敗北に関する神話的仮説。第1次世界大戦において、ドイツは前線の戦闘では敗れておらず、国内の労働者によるストライキなどによって敗戦を強いられたという、参謀次長であったルーデンドルフの説から出た。背後からつきつけられた七首によって敗戦にいたったところからこの名称がつけられ、労働運動、共産主義などを否定するムードを共和政のもとで維持させ、ユダヤ人排斥も含めて、ヴェルサイユ条約を退け、ナチスを台頭させる精神的背景ともなった。 (広実)

アイゲン(愛理)条約 (Aigun) (1858) ロシアと中国(清)の間に締結された条約。19世紀初頭のロシアの東方進出は東北方に向っていたが、ニコライ1世の時代から南下の方向をとるようになった。1847年東シベリア総督にムラヴィヨフが任命され、50年には黒竜江の河口にニコラエフスクを建設し、バイカル湖からそこをいたる黒竜江流域が進出の対象となった。当時クリミア戦争が勃発し、イギリス・フランス艦隊がカムチャツカ半島の基地ペトロパヴロフスクに攻撃を加えたので、ムラヴィヨフは輸送路の確保と称して黒竜江流域を占領、たまたま太平天国の乱に苦しんでいた清に強要してアイグン条約を締結。主な内容は、アルグン川と黒竜江を両国国境とし、ウスリー江以東の海岸地域(沿海州)は共同管理地域とする、黒竜江、松花江、ウスリー江の航行権は両国のみがもつなど、この条約はロシアの中国進出の起点をなすもので、まもなく北京条約(1860)へと発展した。

→ネルチンスク条約, キャプタ条約, ムラヴィヨフ(ニコライ・ニコラエヴィッチ) (藤井)

愛国党 (オランダ) *Patriotten* 18世紀のオランダで近代統一国家形成の原動力となった反総督派勢力。1747年に総督となったウィレム4世のとき、オーストリア継承戦争後、産業ブルジョアジーを中心とする民主派の人びとが、一般市民の政治参加を中心とする政治改革の要求を行ったが、ウィレムがこれに十分応えなかったため、一部の進歩的都市貴族を加え反総督派が形成され、ウィレム5世時代にはいと、啓蒙思想の影響を受けて反総督の気運がいつそう高まり、カトリック派、再洗礼派、ルター派などの諸派も加わって愛国党が生まれた。彼らはアメリカ独立戦争をめぐる総督との対立をいつそう深め、85年には武力蜂起をはじめたため、ウィレムはいったん退位したが、プロイセンの軍事介入で愛国党が敗北し、ウィレムが復位し、数千人がフランスに亡命。しかしフランス革命の勃発により勢力を盛り返し、93年フランス革命軍の侵入に当っては、亡命した指導者ダーンデルスの率いるバタヴィア軍が活躍、95年ウィレムは敗北してイギリスに亡命し、連邦共和国は倒れてバタヴィア共和国が成立。愛国党は統一派と連邦派に分裂するが、ダーンデルスを中心に新憲法を制定、その下で従来州権主義は放棄されてオランダは初めて統一国家となり、フランスの指導の下に不十分ながら封建的諸関係が廃棄されて近代国家の基礎がおかれた。

→ダーンデルス, バタヴィア共和国 (田村)

愛国派 (アメリカ) *Patriots* アメリカ独立革命に際して独立に賛成した人びと。人口の3分の1、実際戦闘に参加したものはその何分の1かにすぎない。保守派と急進派に分れ、同じく独立をめざしながら内部秩序をめぐる権力闘争をおこなった。あらゆる階層・地域にわたるが、保守派は概して社会的上層部——イギリスと直接取引しないかまたは不法貿易にたずさわる商人、これと結ぶ弁護士、南部プランター、中部大地主のごく少数——を中核とし、急進派は小商人、都市の労働者・職人、西部農民、少社の自由職などを代表。ただし、低南部の西部農民および中部植民地での小作農民のなかに勤王派がいたことは注目してよい。1,2の邦を除き、概して保守派が制勝した。→勤王派 (今津)

アイゴスポタモイの戦 (*Agisopotamo*) (前405) ペロポネソス戦争末期の海戦。アイゴスポタモイはトラキアのケルソネソスにある小河。

河口付近においてリュサンドロス指揮下のスパルタ海軍(200隻)が、コノソラの率いるアテナイ海軍に大勝、艦船180隻中160隻、人員数千を捕え、スパルタの勝利を確定、翌年アテナイは降伏。 (藤縄)

ICFTU ⇨ 国際自由労働組合連盟

アイスキネス *Aischines* (前390頃—330以後) アテナイの雄弁家。貧しい学校教師の子。官吏や役者として生活していたが、やがて政界に勢力を得て、前348年マケドニアのフィリッポスとの和平の使者のひとりとして派遣された。フィリッポスに買収され、親マケドニア主義に転向して帰国。2年後デモステネスその他と共に使節に選ばれ、フィロクラテスの和議を結んだが、その後、反マケドニア主義のデモステネスとの間に激しい闘争が行われることになった。前339年隣保同盟評議会で行った激烈な演説は、神聖戦争の導火線となる。のちにデモステネス派に対する告訴に失敗してアテナイを去り、ロドスで弁論術の教師として世を去った。→デモステネス (藤縄)

アイスキュロス *Aischylos* (前525—456) アテナイの3大悲劇詩人中最古の人。エレウシスの神官の一族の出。ペルシア戦争では Marathon およびサラミスに戦った。前468年頃シュラクサイの僭主ヒエロンに招かれ、のち帰国したが、再度シチリア島へ赴き、ゲラで死んだ。従来1人であった俳優を2人に増して対話をさせるなど悲劇の形式を改良し、また内容を思想的・芸術的に高めて、真の意味での悲劇を創造。作品は宗教性にみち、登場人物は超人的な英雄である。ゼウスを全知全能の善なる神であると信じ、神話伝説を解釈し直すことによって、この信念を貫徹しようと努力した。多くの作品のうち伝存するのは7編。『ペルシア人』はギリシア悲劇としては珍しく同時代の事件を扱っており、ペルシア戦争の目撃者の記録として歴史的に重要である。『オレスティア』3部作では氏族制社会における復讐の責任の問題に対決し、ポリスの制度により解決しており、氏族制的社会からポリス社会への進歩を明確に意識している。その言語や文体は崇高で難解。 (藤縄)

アイズナー *Kurt Eisner* (1867—1919) ドイツの政治家。ベルリンのユダヤ人工場主の子として生れる。ジャーナリストとして活躍し、社会民主党に加入して機関紙「前進」の編集者をつとめた(1899—1905)。第1次世界大戦中は、はじめ城内平和を支持したが、17年独立社会民

主党の結成とともに平和主義者として同党に参加した。18年の十一月革命に際してはミュンヘン労兵評議会議長となり、共和政を宣言した。ついでバイエルン州政府の首相となり、19年1月の州議会選挙に独立社会民主党が敗北を喫したのちも政権にとどまろうとしたが、同年2月右翼の青年によって暗殺された。新カント派流の理想主義的な社会主義者。(野田)

アイスランド Iceland 北大西洋上の島。9世紀にアイルランド修道僧が入植を始めたが、ヴァイキングの活動とともに北欧各地から入植者が増加、漁業・海運に従事した。各地で豪族が宗教的・裁判的支配を行っていたが、930年頃豪族たちがアルシングという全国会議を構成しノルウェー法に倣って立法した。10世紀末にはキリスト教が伝えられたが、異教伝統が強く残り、豪族らの内戦もたえず、1262—64年にノルウェーの支配下に入る。12・3世紀の「サガ」はその間の事情を伝えている。1380年ノルウェーと共にデンマークの支配下に入り、16世紀にはルター派も伝えられたが、主教、官僚ともに外国人が占め、デンマーク商人が商業を独占し、アイスランド経済は長く停滞する。19世紀に入ってヨン・シガーズソンが出て独立運動が高まり、1873年自治権を認められ、1918年デンマークとの協定で同君連合の条件で独立を認められたが、第2次世界大戦中ドイツのデンマーク侵入に刺激されたイギリスがアイスランドを統治し、44年国民投票を経てピアーンソンを大統領として共和国を宣言、レイキャヴィクを首府とし上下両院制を布く。48年NATOに加盟、51年アメリカと軍事協定を結んだが、イギリスとの間の漁業係争を契機にソ連にも接近し、53年ソ連とも通商協定を締結した。(富沢)

アイゼナハ派 Eisenacher 1869年アイゼナハで社会民主労働党を結成したドイツの社会主義者グループ。ベーベル、W. リーブクネヒト、ブラッケらがその中心的存在。プロイセンによる上からのドイツ統一に反対し、ラサール派(全ドイツ労働者協会)のビスマルク政府に対する妥協的態度を批判し、これと対立。綱領に第1インターナショナルとの連帯を謳い、マルクスの指導をうけたが、ラサールの思想的な影響もつよくうけていた。74年当時の実勢力は、党員数8767人、帝国議会選挙の得票数17万強、議員数6名。75年ラサール派と合同して社会主義労働党となる。→ゴータ綱領、全ドイツ労働者協会、社会民主党 (飯田)

アイゼンハウアー Dwight David Eisenhower (1890—1969) 合衆国の軍人、第34代大統領(1953—61)、共和政。1915年陸軍士官学校卒業。第2次世界大戦には北アフリカ連合軍最高司令官、西ヨーロッパ連合軍最高司令官などを歴任、43年のイタリア侵入作戦、44年のノルマンディー上陸作戦を指揮し、44年元帥。戦後は48年退役、同年コロンビア大学総長に就任したが、50年にはふたたび軍務に服し北大西洋条約軍最高司令官になった。52年の大統領選挙に勝利し20年ぶりに共和党政権を復活させ、国内では私企業自由、均衡予算主義、労働問題への不干渉など中道主義をめざしたが、軍産複合体を基盤とする軍事化したニュー・ディールを克服できなかった。対外政策はダレス國務長官にまかせたが、ダレスは朝鮮停戦協定成立(53)後「巻き返し政策」「大量報復政策」を展開、インドシナへの介入を進めるとともに中東やアフリカ、ラテン・アメリカでも反共主義による干渉を強めた。→ダレス (高橋)

アイソポス(イソップ) 希 Aisopos 英 Aesop (前6世紀頃) ギリシアの処世訓を含んだ動物寓話の作者。ヘロドトスによれば、サモス人イアドモンの奴隷であったが、デルフォイを訪れたとき、その市民たちに殺された。イアドモンによって解放されたらしく、クロイソスの宮廷で暮し、ソロンに会ったとも伝えられる。寓話を語り聞かされただけで書物にははしなかったらしいが、前5世紀末までには彼の作とされる散文体の寓話が流布するようになっていた。(藤縄)

IWW ⇨ 世界産業労働者連盟

アイトリア同盟 (Aitolia) 中部ギリシア南西部のアイトリア地方に古くから存在した部族組織が、前4世紀半ば以降、占領地の住民に平等の権利を与え、発展強化してできた同盟。前3世紀にはデルフォイの隣保同盟を支配するなど中部ギリシアを中心に勢力をひろげる。海陸での掠奪行為が多く、恐れられた。マケドニアと対立し、ためにギリシアで最も早くローマと同盟関係を結んでいたが、前2世紀はじめセレウコス朝と共にローマと戦い、戦後ローマに服属せしめられた(前189)。選挙による任期1年の将軍が最高職。加盟都市の市民は共通の市民権をもつ同盟総会に出席できる。各都市は人口に比例して代議員を出し同盟評議会を構成、日常の業務にあたらせ、また代議員数に応じて財政を負担した。ポリスが分立割拠したギリシアに

生れた、盟主のない同盟組織として注目される。
→アカイア同盟 (大戸)

IBRD ⇨ 国際復興開発銀行

アイユーブ朝 (Ayyüb) (1169—1252) サラディンの建設したエジプトのイスラム王朝。シリア、メソポタミアの大部分を占領し、ファティマ朝のエジプトを倒し、西アジアを制圧する大勢力となり、十字軍の侵入に対する防衛の役目をなした。エジプトの反十字軍要塞化は紅海経由の地中海交通を途絶、黒海北岸廻りの交通路を発達させ、モンゴル西征の遠因ともなった。またサラディンの採用した外国人奴隷兵制度はイェニチェリの先駆とみられる。サラディンの死後、領土は分散。→サラディン (藤本)

アイルランド Ireland 最古の住民の遺跡は新石器時代に遡る。以後紀元のはじめ頃まで集団的移住の波が数次くりかえされ、その間青銅器時代を経て鉄器時代に移る。最終的には南フランス、スペイン、ブリテンなどから渡来したケルト人がゲール族を形成し、今日なお唯一のケルト人の国家をなしている。彼らは先住者を征服しつつ吸収しその氏族制社会は渡来時すでに変質して、貴族、自由民、隷農、奴隷を含み、私有財産の萌芽も見られる。それが時とともに、血縁社会的な性格から地縁社会的性格へ、小氏族から大きな部族連合へと進みながらも、17世紀半ばまで氏族制社会を保持したところにアイルランドの特色がある。古来ドルイドの民族信仰の世界であったが、5世紀にパトリックによってキリスト教が伝えられ、氏族制度や古来の風習と結びついて、独特の修道院文化を形成し、中世初期の動乱をさけて多数の聖者、学者の渡来もあって、アイルランドの誇る文化隆盛期をむかえ、ブリテンや大陸諸方に伝道活動をひろげ、カロリング朝ルネサンスにも寄与した。けれどもデン人への侵入によって大打撃を蒙った。12世紀半ば頃からイギリスの勢力が侵入。最初はヘンリー2世時代に、ノルマン貴族が族長国家間の内紛に乗じて領地をひろげ、一時は全島の過半に及んだ。しかしデン人の侵入と同様、根強いケルト社会のなかに同化吸収され、イギリスの勢力とみなされ伸び悩んだ。そこでエリザベス朝からプランテーション方式による積極的、組織的なイギリス化が試みられ、とくに cromwell の征服後力づくで推進され、これに対してアイルランド人の抵抗も激しくなっ
て、いわゆるアイルランド自治問題が提起される。→パトリック、アルスター問題、アイル

ランド自治問題、アイルランド自由国、アイル共和国 (原)

アイルランド小作権同盟 Irish Tenant League (1850—52) イギリス系地主の搾取に対抗するため、アイルランド人小作人がつくっていた種々の組織を、青年アイルランド党の指導者チャールズ・ダッフィが糾合して組織したもの。その目的は、アルスターのプロテスタント地主とプロテスタント小作人との間に17世紀以来行われていた小作権保護の慣習法「アルスター規約」を全アイルランドに拡大し、いわゆる3F運動によって小作人の境遇を改善するにあった。1852年の総選挙では、50の議席を獲得することができたが、同盟は土地問題で結束しても、信仰問題では分裂しやすく、またより徹底した土地政策を求める貧農層と結びつかず、短命にして消滅。ダッフィはオーストラリアに亡命した。→3F運動 (原)

アイルランド自治問題 Irish Home Rule アイルランドのイギリスからの自治ないし独立の問題。由来は12世紀のイギリス人の侵入に遡るが、問題が深刻化したのは cromwell の征服 (1649—52) 以来。このとき広大な土地が没収されて、イギリス系地主に与えられ、多数のアイルランド人は土地を失ったり貧農に転落、この地主と貧農との抗争に民族・信仰の対立が加わって自治問題の骨格をなす。さらにジェームズ1世以来アルスターに入植しているプロテスタント植民とアイルランド人との利害・信仰の相違が問題を複雑化する。アメリカ独立革命に際し、アルスターの植民者は義勇軍を組織したのを機会にイギリス政府に迫り、自由貿易と議会の独立とを勝ち得たが、この自治は短命で、1800年政府はアイルランド議会を買収して合同法を成立させた。合同の際の公約たるカトリック教徒解放は29年に実現したので、土地問題が露呈してきた。40年代には青年アイルランド党の合同撤回運動があり、続いて小作権同盟の小作人救済運動 (3F運動) が起り、さらに土地国有を唱えるフェニアン党が出現、議会のバーネル等国民党と結び、土地同盟を組織して激しい闘争を展開したが、最後の段階で中産階級を代表する国民党の離脱にあって敗北。この頃自由・保守両党の勢力の接近から、自由党のグラッドストーン首相は国民党と結び86年、93年の2回自治法案を呈出したが成立しなかった。1912年同様な形勢から自由党のアスキス内閣が第3次自治案を上程、今度はアルスター

一で激しい反対が起り、プロテスタントとカトリックとが武力抗争の危機に臨んだが第1次世界大戦のため回避された。大戦中は国民党はイギリスに協力したが、シン・フェーン党や労働組合はむしろこれを機会に独立を達成しようとし、16年復活祭蜂起を企てたが失敗。戦後イギリス政府はアルスターと南アイルランドとにそれぞれ自治領の資格を与えることを提案し、アルスターは受諾、南アイルランドでは諾否についてシン・フェーン党が分裂したが多数を占める右派が受諾に決し、22年アイルランド自由国が成立して、ここに自治問題にいちおうの終止符を打った。→アイルランド、アルスター問題、グラタン議会、合同法、復活祭蜂起、シン・フェーン党、アイルランド自由国 (原)

アイルランド自由国 Irish Free State (1921—37) イギリス自治領時代のアイルランドの名称。アイル共和国の前身。アスキス内閣の第3次アイルランド自治案はアルスター問題未解決のまま、第1次世界大戦のため実施延期となったが、1918年の総選挙でアイルランドの多数を勝ち得たシン・フェーン党議員は、ウェストミンスター議会の議席を離れ、別にアイルランド議会を組織して独立を要求。ロイド・ジョージ内閣は北アイルランド(北部6州)と南アイルランド(南部26州)とを分け、それぞれに自治領の地位を与える案を提議し、シン・フェーン党の多数を占めるグリフィス等の右派はこれを受諾。22年アイルランド自由国の成立を見た。デ・ヴァレラ等左派はこれに従わず脱党して別派を作ったが、27年復帰。新政府の治績あがらず、デ・ヴァレラ等左派の勢力高まり、37年政権を握り、憲法を改正して独立を宣言。国名をアイル共和国と改めた。→シン・フェーン党、アイル共和国、デ・ヴァレラ (原)

アイルランド征服 ⇒ アイルランド

アイルランド土地同盟 Irish Land League (1879—82) アイルランド問題の焦点は土地問題である。3F運動などで小作権を擁護しようとする国民党と、「耕地は直接耕作者の手にかえせ」と主張するフェニアン党との一時的協力から生れた。1879年マイケル・デヴィッドが組織した。この農民の実力行使に対して国民党(議会における自治派)は、はじめ反対したが、党首パーネルが進んでこれと結び、ボイコット戦術などで地主と対抗した。イギリス政府は土地同盟を非合法団体であるとし、パーネル等を投獄したが、その後同盟の闘争が革命的になる

につれて、パーネル等国民党は離反し、またグラッドストーンの政府は土地法を制定して小作人の要求の一部を実現したので、同盟は崩壊した。→パーネル、3F運動、ボイコット事件、フェニアン党、統一アイルランド同盟 (原)

アイルランド文芸復興 Irish Renaissance

1890年代にアイルランドに起った、イギリスに対する民族的抗争と結びついたケルト伝統への復帰運動。19世紀半ばまでは、アイルランド人はおおむね固有のケルト語を話した。その後、大飢饉による大量の死亡、海外移住に加えて生活上の必要からもケルト語人口は急激に減少した。ダグラス・ハイドはこれを憂慮し、93年「ゲール同盟」を組織してケルト語およびケルト文学、伝統の復興をはかり、これに詩人イエーツ、劇作家グレゴリー夫人、劇作家シング等も加わった。彼らはこれより先91年「アイルランド文学協会」を作り、ケルト伝説や詩歌の収集につとめ、進んで民族文学運動を展開しつつあった。99年にはさらにその行動の場として「アイルランド国民劇協会」を組織してその作品を上演し、1904年にはダブリンに専属の劇場「アペー座」をもった。この運動は同時代のアイルランドの政治運動と無関係ではあり得ないが、主要人物がおおむねプロテスタントであって、むしろイギリス文学との相互関連に注目すべきものがある。 (原)

アイル (アイルランド) 共和国 Republic of Eire (1937—) アイルランド自由国が1937年デ・ヴァレラの指導のもとに、自治領の地位を脱し独立を宣言した新国号。チェンバレン政府もこれを承認。39年第2次世界大戦が始まるとアイルは中立を宣言。さらに48年英連邦からも脱退して完全な独立国となり、アイルランド共和国と称した。しかし国民生活の改善、産業の育成などの重大政策が容易に効果を挙げず、共和国の前途は多難である。59年にデ・ヴァレラは首相の地位を退いて大統領となり、そのあとを継いだレマン首相は、北アイルランドとも友好を保ち、また北アイルランド分離に反対の北アイルランドのIRA(アイルランド共和軍)も62年いちおう暴力を否定したものの、北アイルランドが強硬なプロテスタント優越の政策をつづけ、これに対して同地方のカトリックが反抗して、70年頃から流血の紛争をつづけていることは、共和国の政策に困難な問題を呈示している。→アイルランド自由国、シン・フェーン党、デ・ヴァレラ、アルスター問題 (原)

アインシュタイン Albert Einstein (1879—1955) ドイツ生れのユダヤ系理論物理学者。ウルムに生れ、スイスに移り、チューリヒ工科大学卒業。チューリヒ、プラハの各大学教授、ベルリンのカイザー・ヴィルヘルム物理研究所長等を歴任。1914—15年一般相対性理論を樹立。21年量子論への貢献によってノーベル賞を授与された。その後統一場理論の研究に従事。33年ナチスのユダヤ人弾圧を逃れてアメリカに亡命、帰化した。プリンストン高等研究所で研究に従事、反ファシズム、平和主義の運動にも協力した。(野田)

アインハルト Einhard(770頃—840) フランク王国の政治家、学者。フルダ修道院に学び、792年頃にカール大帝の王廷に入った。そこでアルクィヌスの指導をうけ、ギリシア・ラテン学者として令名高く、また土木・建築などにも明るくアーヘンの王廷や教会の設計に当った。また政治家としても813年貴族集会の議長としてフランク帝政の運営に活躍した。カール大帝の後もひきつづいてルートヴィヒ敬虔王の顧問たりつづけたが、政争をきらって830年引退した。彼の代表作『カール大帝伝』は817—822年に書かれたが、カロリング家の歴史、カール大帝の外征、私生活を描いたすぐれたラテン文学である。→アルクィヌス (富沢)

アヴァール族 Avars 元来は中央アジアのモンゴル系遊牧民族。5世紀頃から移動を開始してヨーロッパに入り、557年、東ローマ皇帝ユスティニアヌスにせまって、パンノニア(現在のハンガリー西部)の居住権を獲得。その後ドナウ流域を中心に、黒海・バルト海・エルベ川に至る広大な地域を支配して、しばしばコンスタンティノープルを攻略。やがてカール大帝の遠征によって大打撃を受け、9世紀末には東方から進入したマジャール人と混血した。(齋田)

アヴィケンナ Avicenna 原名イブン・シーナー Ibn Sīnā(980—1037) イスラムの哲学者。ファーラービーの上立ってアリストテレス哲学をイスラム思想に同化した。ボハラでベルシアの子に生れ、官吏としてまた放浪者として波瀾の多い生涯を送り、多くの著作を残した。中世を通じて偉大な医学者として有名で、その著『医学正典』は東方とヨーロッパを通じて中世医学教科書となったが、哲学者としてもすぐれている。最も独創的な作品は失われたとされている。その著『快癒』は哲学大全とされているが、そこにあるのは彼自身の哲学というより、

アリストテレスについての彼の解釈で、彼はアリストテレスを新プラトン主義風に解釈している。(兼岩)

アヴィニオン幽囚 Avignonese Captivity

⇒ **バビロン幽囚**

アーヴィング Washington Irving (1783—1859) 合衆国文学の創始者といわれ、『スケッチブック』(1820)で有名であるが、彼の作品はアメリカ社会の現実を十分に反映するものではなく、思想史への影響はすくない。(長田)

アウエルシュテットの戦 ⇒ **イエナ・アウエルシュテットの戦**

アヴェロエス Averroës 原名イブン・ルシュド Ibn Rushd(1126—98) イスラム最大の哲学者。中世ヨーロッパへの影響は大きく近代にまでおよぶ。コルドバに生れる。諸学に通じ、裁判官となり、またカリフのアル・マンスールの侍医をつとめ、栄誉と不遇の交錯する生涯を送った。学問活動はアリストテレス研究を中心とし、中世ではアリストテレス註釈家という意味で「コメンタトル」と呼ばれた。コーランは読む人の精神により違った意味をもつ、人間精神はそれぞれできるだけ完全な方法でこれを解釈する権利と義務がある、下級の精神はそれに可能な解釈の段階をこえてはならないし、高級の精神の解釈を下級におしつけてはならない。この考え方からのちに二重真理説が生ずる。また宇宙は神により創造されたものであるが永遠のものであり、個人はそれ自身としては不滅ではない。彼の説はヨーロッパへ入ってスコラ学的发展をうながすが、同時にその崩壊をもたらす。プラバントのシゲルスはラテン・アヴェロエス説で異端になる。→シゲルス (兼岩)

アヴォガドロ Amadeo Avogadro(1776—1856) イタリアの化学者、物理学者。1820年に降トリノ大学教授。1811年いわゆる「アヴォガドロの仮説」を提唱し、現代化学体系の基礎をきずいた。このほかにも研究業績は電気、液体の膨張、比熱、毛細管現象などにわたり、また社会的には統計、度量衡、気象観測などの公務にもたずさわった。(永井)

アウグスティヌス Aurelius Augustinus(354—430) キリスト教教父、正統キリスト教の基礎を確立した人。ヌミディアのタグASTEに生れる。父は異教徒、母モニカは熱心なキリスト教徒。タグASTE、マダウロス、カルタゴで勉学。このあとローマに渡りさらにミラノに移り修辭学の教師となる(384)。この間一時マニ教徒と

なるなど思想界を遍歴したがミラノ司教アンブ
ロシウスの教えに接しキリスト教に傾斜、やが
て回心、受洗(387)にアフリカに帰る。ここで
友人と修道的生活を送ったあとヒッポ・レギウ
スの司教となり(395)以後ほとんどこの町にと
どまり司牧にあたった。この間ペラギウス、ド
ナトゥスらの異端派、さらには異教徒の反撃に
断乎対決して正統信仰を擁護した。哲学的・神学
的著作は非常に多いがとくに『告白』と『神国
論』は著名。前者は幼年期に遡り自己の思想的
遍歴の過程を詳細に叙述したものであり信仰の
書として後世に洩りしれぬ影響を与えた。後者
は410年の西ゴート族によるローマ侵略を、伝
統的宗教を無視したキリスト教徒に対する神々
の報復であるとした異教徒に対決して執筆され
た護教書、キリスト教的世界観にもとづく歴史
哲学の書である。彼はヴァンダル族による包囲
のさなか死す。→神国論 (新田)

アウグスティヌス (カンタベリの) *Augustinus Cantabrigiensis* (?—604) 初代カンタベ
リ大司教。ローマのサン・アンドレアス修道院
の副院長のとき、教皇グレゴリウス1世により
えらばれて、アングロ・サクソン族改宗のため
派遣する40人の修道士の長となり、597年イギ
リスのサネット島に上陸。ケント王国において、
国王エセルバート以下の改宗に成功した。601
年カンタベリ大司教に任ぜられた。(鈴木)

アウグストゥス *Augustus* (前63—後14)
初代ローマ皇帝(前27—後14)。幼名オクタウ
ィウス。ローマで生れる。母アティアはカエサ
ルの姪。前45年カエサルに従ってスペインに
遠征。翌年マケドニアのアポロニアでカエサル
の死を知る。遺言により後継者に指名されガイ
ウス・ユリウス・カエサル・オクタウィアヌス
と名のる。はじめアントニウスと不和であった
が共和保守派に対抗しアントニウス、レピドゥ
スと共に三頭政治をおこなう。前42年、フィ
リッピの戦でブルトゥスら共和派を破り、レピ
ドゥスの死後アントニウスとローマを二分統治
した。前31年アントニウス、クレオパトラの
連合軍をアクティウムの海戦に破り単独支配者
となる。彼は勝利者、平和回復者、ローマ伝統
の擁護者として人々の信望をえた。前27年、
共和政の復興を宣言し、彼は国家を自己の権限
から元老院とローマ人民(*Senatus Populusque
Romanus* 略して SPQR)の意志に委ねた。その
功により元老院からアウグストゥス(「尊厳な
る」の意。「Augustus」は元来ローマ共和国の

聖職者の称号で *humanus*=俗人の対立語。テ
ィベリウス帝は一時この称号を辞退した。しか
し歴代皇帝がこの称号を唱えた)の称号を贈ら
れた。これにより彼のローマ国家における優位
は決定づけられ、第6の月は *Augustus* (8月)
と呼ばれた(ローマの第1の月は今日の3月で
ある)。アウグストゥスがえた支配権は10年期
限のものであり、その権限は元老院から委託さ
れたものであった。しかし任期満了ごとにその
期限は延長され、事実上皇帝に等しい地位に昇
った。ローマはこのときから元首政(プリンキ
パトゥス)へ移行する。彼はアグリッパ、ティ
ベリウスらの有能な協力者を得、辺境地に多く
の植民都市を建設して帝国の拡大強化、属州の
再組織にあたった。ケルン、マインツ、トリア
ー、アウクスブルク、オータン等彼の治世下に
建設された植民都市の数はきわめて多い。彼の
治世中ラエティア、ノリクム、イリュリクム、
モエシアが帝国の属州となった。しかし属州ゲ
ルマニアの国境をエルベ川まで延ばす意図は失
敗した(→トイトブルクの戦)。彼はティベリウ
スを後継者とした。アウグストゥスという称号
は帝政末期、正帝・副帝制を採ったディオクレ
ティアヌス帝以降は正帝を意味し、劣格の皇帝
カエサル(副帝)とは区別して使用された。→レ
ス・ゲスタエ・ディウィ・アウグスティ、プリ
ンクペス (新田)

アウクスブルク宗教和議 *Augsburger Reli-
gionsfriede* (1555) ドイツにおけるカトリック、
プロテスタント両派の対立を調停すべくアウク
スブルクに召集された帝国議会の決議。それは、
1) 諸侯および帝国都市は新旧両派のいずれか
を選択する権利をもち、住民は彼らの選択した
宗派を信奉しなければならないが、それを欲し
ない者は他に移住しうる、しかしルター派以外
の新教は禁止されること。2) カトリックの大
司教や司教がルター派に改宗するときはその地
位と領土を失い、カトリック派の後継者が任
命されること。3) 1552年(パッサウ帝国議会)
前に没収された教会領は現行のままとするが、
それ以後に没収されたものは旧に復すること、
などの諸規定を含み、宗教改革運動以来の両派
の対立をいちおう終熄させたが、その不徹底な
妥協的解決は、やがて三十年戦争の勃発を招く
因となった。また「支配者の宗教がその領内
に行われる」との原則は、すでに実現されつつあ
った領邦教会制を最終的に確立したとの意義を
もつ。→宗教改革 (中村賢)

アウクスブルク同盟戦争（ファルツ継承戦争） (Augsburg, Pfalz) (1689—97) ルイ 14 世の行った侵略戦争のひとつ。1685 年、ファルツ選帝侯カールが死し男系が絶えた。ルイ 14 世は弟オルレアン公の妃がカールの妹であることを理由にその領土を要求、これに対して 86 年オランダを中心に神聖ローマ皇帝、スウェーデン、スペイン、バイエルン選帝侯、ザクセン選帝侯らの間にアウクスブルク同盟が結成された。88 年にオランダのウィレム 3 世がイギリス王（ウィリアム 3 世）となったので、イギリスもこの対仏大同盟に参加した(89)。この同盟にはサヴォイも参加。戦争はヨーロッパだけでなくアメリカでも行われたが（アメリカでの戦争は「ウィリアム王の戦争」とよばれる）、主な戦闘としてはフルーリュスの戦(90、フランス軍勝利)、フランス艦隊のアイerland遠征(90、ジェームズ 2 世のため失敗)、ラ・ホーク岬の海戦(92、フランス軍敗北)、ラゴスの海戦(93、イギリス軍敗北)、ネールヴィンデンの戦(93、フランス軍勝利)、その他イタリアでの戦闘などがある。この戦争は 96 年 5 月トリノでフランス、サヴォイ間に単独講和ができたのをはじめ、97 年 9 月、10 月のライスウィク条約で終結した。→ウィリアム王の戦争、ライスウィク条約（前川貞）

アウシュヴィツ Auschwitz ポーランド名オソフィエンチム Oświęcim。ポーランド南部、旧都クラクフ西方に位置する地方工業都市。第 2 次世界大戦中ナチス・ドイツはユダヤ人絶滅政策にそい、その郊外の広大な原野に巨大な強制収容所を建設。ドイツ本国と占領地のユダヤ人、戦争捕虜、政治犯を常時約 25 万人収容。強制労働、栄養失調、伝染病をはじめ、戦局の進展で大量虐殺を目的にしたガス室の使用により、1945 年の解放までに約 400 万人の犠牲者をだしたといわれる。（中山昭）

アウスグライヒ ⇒ 妥協問題

アウステルリッツの戦 (Austerlitz) (1805・12・2) ナポレオンがオーストリア・ロシア連合軍を破った戦闘。オランダ、イタリアなどからイギリス商品を締め出そうとしたナポレオンに対し、イギリスは 1805 年第 3 回対仏同盟を結び、トラファルガルの海戦でナポレオンのイギリス上陸作戦を不能にさせた。ナポレオンは大陸の同盟加入国に矛先を向け、モラヴィアのアウステルリッツ付近でオーストリア・ロシア連合軍を破り、オーストリアにプレスブルクの和約を結ばせ、対仏同盟を切り崩した。オース

トリア、ロシア、フランスの皇帝が参加したので三帝会戦ともいう。→プレスブルクの和約、対仏同盟（広実）

アウストラシア Austrasia メロヴィング朝フランク王国の分国のひとつ。その名は「東の王国」の意味。ゲルマン的色彩の濃いロートリンゲン、ベルギー、ライン右岸を含み、534 年クロタール 1 世の甥テウデベルトが王位についたのがはじめ。ネウストリアに比較して農業的色彩が強く、内乱期を通じて大土地所有に基礎をおく貴族勢力が躍進、彼らに支持された分国宮宰のカロリング家は、やがて王国全体の宮宰を経て正式にフランク王位にのぼる。→メロヴィング家、ネウストリア（鱈田）

アウストラロピテシネ Australopithecinae 語義は「南の類人猿」。南アフリカで発見された一群の古生化石人類の総称。発見はダート教授の 1925 年のトランスヴァール地方におけるアウストラロピテクス・アフリカヌスにはじまり、戦後におよんでいる。いずれも地質学上は、洪積世前期から中期にかけてのものと考えられ、頭蓋容量がきわめて小さく、形態学的には、猿か人かにわかに決めにくいほど原始的なものである。なかでもヨハネスブルク付近で 1947—50 年の間に発見されたパラントロプス・クラヴィスはきわめて猿に近く、ジャヴァのピテカントロプス・エレクトウスよりも原始的である。このほかプレシアントロプス・トランスヴァールンシス、パラントロプス・ロブストゥス、テラントロプス・カペシシス、アウストラロピテクス・プロメテウス、ジンジャントロプス・ボイセイなどがこれに属する。文化的にはオールドヴァエイ文化に属し、古いものは 100 万年以上前のものとみられる。（樋口隆）

アウソニウス Decimus Magnus Ausonius (?—395 頃) ローマ帝政末期の学者詩人。ボルドーに生れる。はじめ故郷の町で文法・修辞学の教師となる。その才能をウェレンティニアヌス帝に見出されてトリアーに招かれグラティアヌスの家庭教師となる。のちガリアの長官、コンスルとなる。グラティアヌス帝の死後故郷に帰り文人と交りつつ詩作にふける。多くの詩のうち最も重要なものに『モセラ川』（モーゼル川）があり美しい風物を歌っている。またローマ帝国の代表都市 20 をとりあげて描写した『代表都市』も有名。（新田）

アウディエンシア Audiencia スペイン領アメリカ植民地の司法・行政機関およびその管